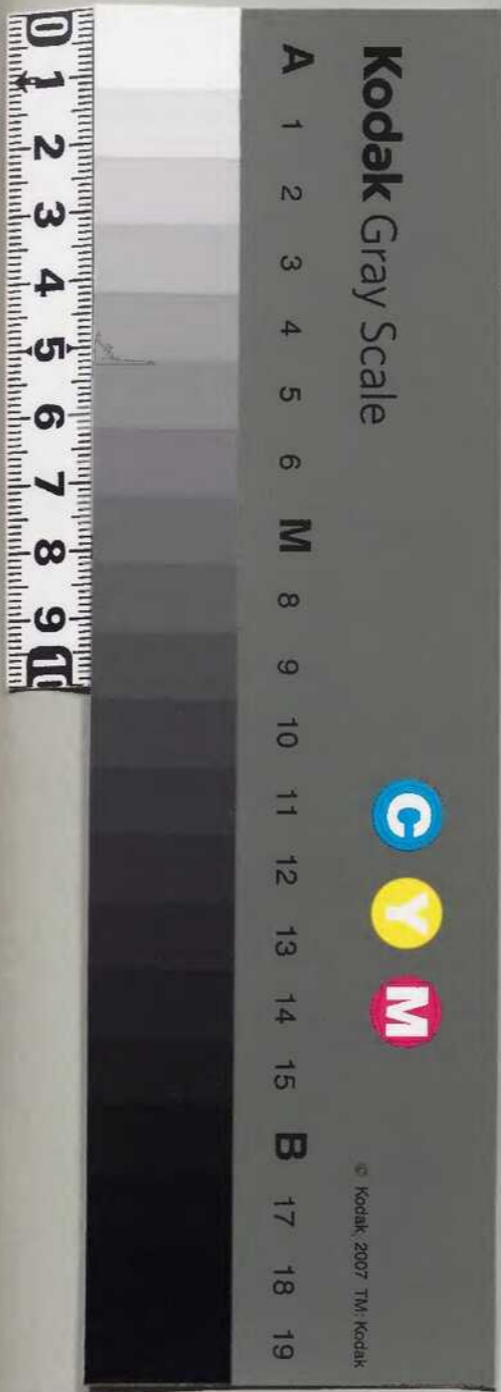


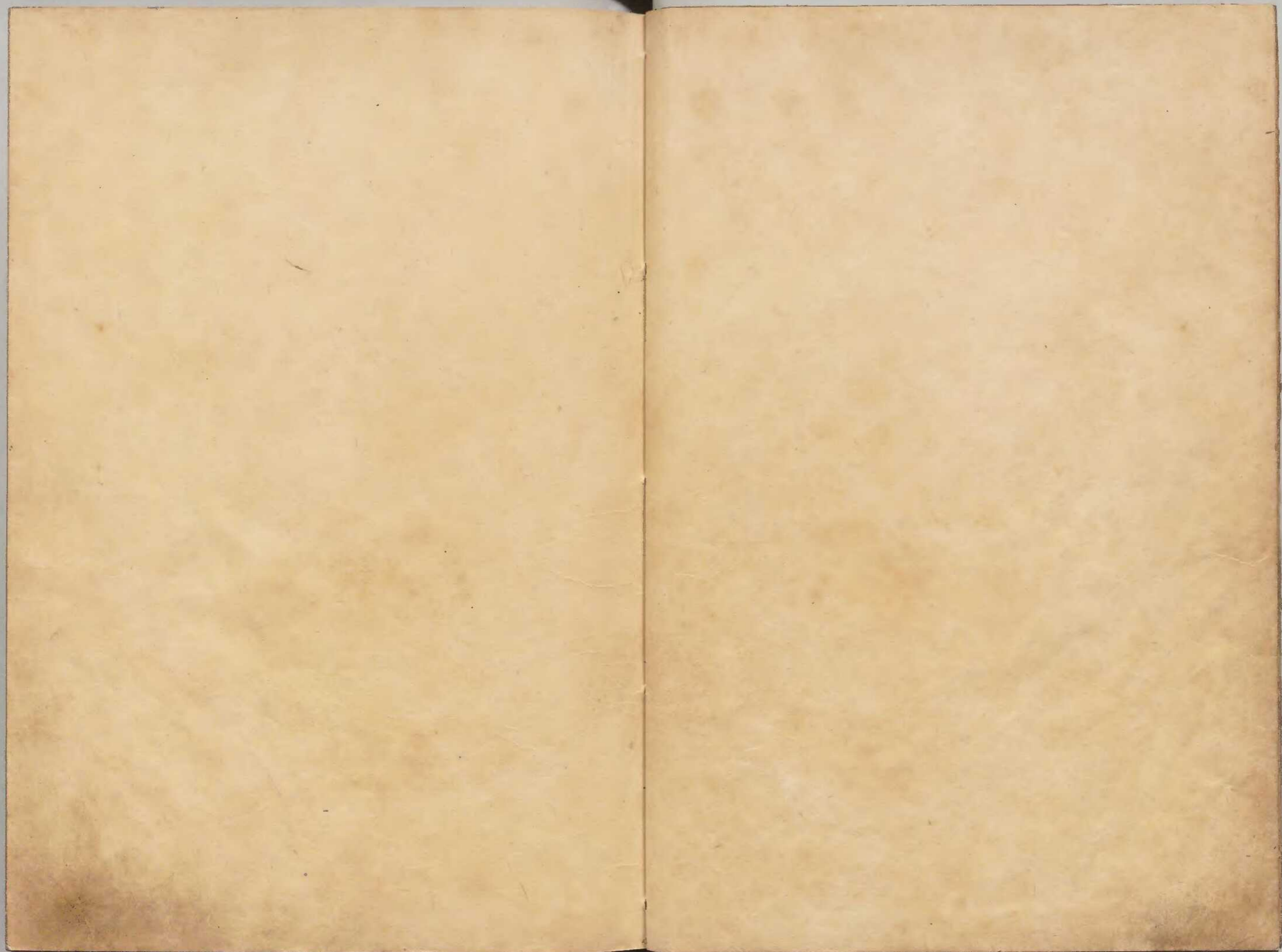
寛永諸家譜

清和源氏乙五冊之内
義家流之内是利流

19

内閣文庫		
番號	和	20199
冊數	186	(17)
函號	76	1





林原

白井

寛永諸家系圖傳

清和源氏

義家流

足利流

林原

乙四

淺草文庫

家傳いへでん小こいいくく仁木にき義長ぎちやう後ご流りゆう銀ぎん列れつ
 志し郡ぐん林原はやし乃の里り小こ伯はくをを好このり
 冬ふゆ列れつ小こいいははりりてて后ご伯はくをを

清長

孫十郎

七郎右衛門尉

長政

七郎右衛門尉

永祿五年卒

康政

小平左

武部大物

天文十七年冬別と晴小生

永祿六年三別と野をけりて強

あすす時り年十六其後

東照大権現了法其そまつり子小御前

小作してゆいみか乃康の字をたま家

曰十一年十二月一撰尾坂表四郎なむ

小大澤氏の家人等を別堀川の城小

おも

大権現兵といきわくこまをせ決たまふ

時康政一番小城申小せめりりて終てわ
らせ敵とらりてはわ小城と申も康政
の二ヶ所乃底と申も家

大権現こもときこめてふくこりた
ま其後を別久留の城より久留三郎を
大権現よまごひそまつふ河波一族久留
乃城小ありて迷心と申けま康政為治
とらけたまりりてこもせし

同十二年今川氏真を別懸河乃城小

大てあり時康政諸將と曰く先と
なりてこもせめを城と申もす氏真敗
走し

曰年を別天方乃城より天方守郎三郎
氏真小居も懸河没落の後

大権現軍とすめて天方と申もみたも時
康政先もをうけたまりりて二丸とせめ
屋が小より城に降る也

元禄元年相倉義景滝井長政あ人

織田信長と和ふたりて合戦ありお
よのり

大指現軍といきわく信長とまうしに長
船倉をふせりし事と

大指現ふこころきみより六月廿八日江別河
よて大合戦あり康政酒井大指河野源
少おきく先もころ忠次河とまりて
敵陣みむようのあひごみ康政とみやり
み川とまりて忠次は先ころてまわひみ

細倉が陣とらるる船倉が士率敗れ
康政力戦して底とかりし事

曰三年十二月二十日

大指現武田信玄と争列三方原と合戦
のり康政一も乃長とかりし事

天正元年八月廿日武田勝頼が叔父刑部
少輔信總道遠軒と号しなびみ甲列の法侍兵

といきわく争列の森より九月廿
康政大須賀五郎大指河野源等の法

將とこもさうらなふ

同三年五月二十日

大権現武田勝頼と三列長篠にて合戦の時康政諸將と曰く先もさなりてさうら敵と曰く勝頼やぶきて引退く

同年

大権現軍をすめてを別光の城とせめたまし時康政なぬ平八志勝と曰く先もさなり城を勝頼が家人物比奈某和を

幼て城と退く

同年七月二十日

大権現を別光の原乃城小津交向のとき康政先がけをうけたまはりて是とわが八月二十四日城を今福丹波城と改てさあこもさうらもさうらで小山よあむきたまひすぞうして沙退陣の時康政敵とさうせひぐわあり

同六年五月

大権現駿河川中一乃城をせめたまふ河原
供を以て軍切あり

曰八年十月より康政なりび小大須賀
又部は清門康言等の詔約

大権現小志しうひたてしうりを引言天祿
乃城と圍み翌年三月二十日城を責

押し城を墨部母波討死をすふり
之城ととあ

曰十年七月康政

大権現一供を一山糸氏直と申列新府

小射陣の時八月二十七日康政敵のあせ
とき一兵とらて敗走せし

曰十二年豊后秀吉織田信雄と小和
一合戦よおふの時信雄をくひと

大権現小よより信長と四好あふゆふ
四月九日尾引長久とて大合戦あり

大権現康政を先もして大須賀又部は
水貯物兵清本多豊後守母羽助あふ

あひさるに三好孫七郎秀次ひでしげうつくさうら
ていごみたうひ大ふこれと屋敷家いせの秀次
敗れしくわいり康政又沖旗おきなりーとせくし
りて池田猪入いけだ陣まとらやが家
同年六月瀬河たせがわ尺近せきちか一益ひとえ米田まいた与十郎と
尾列ひし解雲かゆん江の城と木崎きさきひとらんとらんとらり
て米田よへ与平次へいじ小米田こまいたの城をまもる
大指現おほさしげん清剛きよたかよてこまこまとままとめめれれももみ
やふ小御馬こみまと出されて米田まいたの城とせめ

たまふ時康政きやうせい供いをおして戦功せんこうありはわふ
城じやうをおももいい家けはは付つふ
大指現おほさしげん下したんで解雲かゆん江の城えのじやうをかこみなふ
時酒井さか大浦おほ門かど尉をらならび小長澤こながさわの士し年としハ
大おほにに小こむむふ其その後のち康政きやうせい小命こいのちとて是こ小
りりて大おほももををせめせめいい其その日ひののこれこれののいいよ
三さん丸まる三さん丸まるとせめやぐりその木きささむむれ
とらりの兵へい黒くろととらら一ひと益えきととららよよなな丸まると
ああままりりとと十じゆ郎らうととままりりててふふののめめががいいと

謝一降糸とくく城と退く

大権現いさきと引ておりたまふ時康政一

人小命して小牧と寄しめてと方の

おまゝといたまふ康政あつた小城とあま

へて防戦のそな人とあま

日十四年

大権現秀吉と和睦の事なりて縁を

やくも何小秀吉

大権現小こひて康政を入海せし康政

宗小いなり先富田たそが家一りおむ

秀吉を登城をまゝすしてたらまら

た進が家小こりて康政が勢でたぐ

さめてゆせきおりの風守小牧

陣乃河をんぢりめづ一父と書して秀吉

冬主君の恩とあつて佐雄と共と

かまふおそ悪逆のちかまづしき事いひ

はすすべしとあつて秀吉一属もつり

徳さつひいさか義をまゝおのなり

とらへて我こそと入てかんぢらが首とえて
とらへてせんとす事ひさしとれども
今日日ごろのうみも教どてえぢら
主小忠おふとも感どもとらへ日康
政登城一秀吉小濁して浜松小かん
る五月十日官秀吉の妹を

大権現小嫁せしじう時浜松小いさる先
輿と康政が家よりせて垣城小入て嫁
礼あり

同年十月九日康政從五位下に叙
武部大輔小畑を

同十八年豊臣秀吉北条氏を征伐のな
小田原の城よりこむ内

大権現をたきく教向一たきく康政
先づけをうけたまひ四月五日相列酒匂小
たかく兵とあせとき敵兵の城小い
こまふものよりうらむらむいあるひを
首とらへるひは捕りものこまありし由宗

没落ぼつらく一いち小糸氏こいと改自叙かみじき乃河康政のかわこうせいと秀吉ひでゆき
の揆使けいし三人さんにんといいくく流ながてて是こゝとと人ひと取と
其後康政一人のち別わか乃木のぎりりせせししりりてて由よし宗むね
乃城のしろとといいけけりりとと云いふ

大権現おほごんげん圓東えんとう八列はつれつと傾かたむトトななららししとと野田ののた園えん
館林くわんりんの城のしろと康政こうせいよよたまたまりりりり邑楽いさく野田ののた
のああ郡ぐんををかか下した野田ののた園えん深田ふかた郡ぐんののららとと云いふ
同年このとし奥列おくれつ大崎おほさきと一揆いっけん起おこりりてて森もり
弥右衛門やゑもんととかかここむむああにに

大権現おほごんげん三河守みかわのしゅ秀康ひでやすととててここままととままくくりり

む康政こうせい也なりととなりなりてて奥列おくれつ小こつつとと云いふ
同十九年このことしゅうじゅうきゅうねん奥列おくれつ九部くべ一揆いっけん起おこりり乃河秀吉のかわひでゆき
ととかかここらら秀次ひでつぐ小こ命いのちトトててここままととままくくりりとと云いふ
大権現おほごんげんもも又またししととををいいききおおてて是こゝとと澤さわ小こいい

たたりりたまたましし康政こうせい也なりとと云いふ
文祿元年ぶんろくねん秀吉ひでゆき朝鮮ちやうせんをを征討せいたう乃木のぎりりたためめ取とり
乃木のぎ護屋ごやとといいふふとと云いふ

大権現おほごんげんもも甲こうとといいふふ教しやく向むかありりここののここびび康政こうせいとと

江戸小島あり

白徳院殿小法久そまつつじじここききよよ

いいほほままふふらら輔輔依依乃乃長長ととなるなる

慶長五年上秋系勝むしんのの時時

大権現東証ていゆゆてて下野國小島しんあり

たまふ

白徳院殿を宇津うつままよよ御陣ごじんととなるなる康政

先陣ととなるなる時時

大権現乃おおつつせせ小小いい陣じん先先年ねん度どのの志し別べつ

小まませせてておおんんぢぢをを先先づづけけとといいひひめめたままふ

とといいふふ愛あい小こおおわわくく留りゅう之の成なり謀まう叛はんののままききこ

ええあありりけけきききき

白徳院殿を仲山道なかつやまみちとといいふふとと方かた小こおおももむむ

きたきたままふふ時とき次つぎにに康政先先ももけけしし年ねん

一いちつつまま田たがが城しろ下したのの在ありり家いえ小こ宿しゆくもも康政款

乃の中ちゆうににおおううひひききここんん事こととといいふふ

むむららりりてて俄い小こ士し率りつ小こ命いのちとといいふふ野や外が小

たたじじりりせせししむむるる本ほん美み田た安あ房ぼう守しゅひひくくははしし

とわうらんさせしうがも康政が兵と雖も
小出もゆとえてすかりらじうしく疎小
のりいふ

四十年

徳院殿沖と海ありて征夷大將軍
御どいしび返次乃は還小康政ゆさき
小供をしし系内河々驛馬よて庵
縦も

大権現驛府し河産の時江戸より耳も

乃とせたまふ將軍この比をたふこと
成りたまふやたまうまがしをせし
武道と強しゆと苦(中略)つれをき
あめられて將軍軍法の事をきりせ
たまひしよ林系或部を捕こり人数お
くはふとも成るはげき召用屋し
の匠吏乃常を何れ益あしやとのなみ
しを松平太活門を吏正久等御かこり
てこそとせたまふしうりく人よる

曰十一年卯月のらるり康政病やまひりて
りし事をきあめりて

白徳院殿より酒井雅樂頭忠世よしのぶと井大炊頭
利勝としかつと病が仲ちゆうつりてきたまひ又醫師
延香院えんかういん玄朔げんさく玄鑑げんかんそ乃なり外ぐわい本道ほんだう外科げいこ乃
單たんあまあまいい療治りょうぢ乃なりためためみみここささふふ
乃なりと使しくくむむびびくくありて安吾やすごととせ給たまふ
大権現おほいけんげんより色いろののここきき御ごつつひひあり

曰年五月十日ごご冒もう籍林しやくりんの城しろありて年とし一ひとと

年五十九 法りつ必ひつ見けん向かう

はとまき

白徳院殿より河部あべ海うみ中なかつ守しゅとと使しりて
妻つまををととせせたたまま酒井忠世さかゐのちよと井利勝しよ
と印しるしありて

忠政

五郎次ごろうじ浦門うらもん尉ゑい 出羽守でいのり 従五位下
天正九年てんしやうくわんをを引ひ濱はま松まつとて生なま象ぞう

忠長 なまつ

母を大湊賀五郎大膳門尉康高がじいさま
康高が養子となりて大湊賀村家を
お預けし事々大湊賀の藩中へ入るなり

伊豫守 いよのし

従五位下

天正十三年を別演松小生家

台徳院殿より忠の字をたまはる

慶長五年京勝謀叛の時康政少白

出陣し其後中山道とて去る

了教向也 らうきやう

同九年二月十五日卒去 ありきよ

年二十

法名光白 くわうはく

康勝 なまつ

小十郎

忠信守 なまつ

始の名政直 はじめ

天正十八年相別小田原の旅宿より生家

慶長十年四月二十六日従五位下

叙し忠信守より恒也

同十二年康政卒去乃坂家督とて

日十九年乃冬大坂陣の時康勝先小
はつらつて供を十一月廿五日大和河の
色一陣とらぬ松平丹波守丹羽五郎左門
成田左馬助是小属も二十六日城中より
木村長門守崎野口一出張して伏見
義宣よりみたかみ義宣も小属
しるし時康勝が家人河とくしるしあ
ひよめりて二もとくしるしあ
長門守中ふしきとくしるしあ
長門守中ふしきとくしるしあ

と天王寺よりうけ

元和元年大坂再戦の時康勝先とくし
たまりて供奉も小笠原兵部大捕
諏訪出雲守仙石兵部少輔保科肥後守
丹羽五郎左衛門成田能中守こも小属
五月廿日坂堂和泉守ハ河列久法ちりお
かて長曾我部小むし井伊掃部頭ハ
若江小おかて木村長門守小むし康勝
成田小おかて木村計頭とわいしる

て勝利とえて首七十余をうらとけむ計以
敷乞一喜屋鴨鴨のあひ小入る 之計頭ハ本村
長門守が叔父也
曰七日康勝くさを天王寺小まめく合戦
一又七十餘れ首とさうりて御陣陣は
曰月二十七日京都より平玄 二十余衆
法名ろ英

孝

母を忠改小回一
酒井雅樂頭忠世が室

孝

松平玄菟守利隆が室 酒茶の将光政が母なり
白徳院殿の御中一まひいじもあかり 伏見の陣
より利隆が館小入て増礼あり

忠次

玄部大膳尉 玄部大捕
慶長十年遠列横須賀へ延生
母を松平因幡守康元がむしめ

らどめ大須賀の家とはげ

同十九年大坂陣の時

大権現のお母せりりて家乃郎等と

大坂乃戰場（えさば）お母しりりし忠次（ちゅうじ）幼少

かたよりり釣命（つりめい）とありて横須賀

小島より忠次らと大坂小

じりんととる海次と和睦の本を固

て陣（じん）も

元和元年大坂再乱の時忠次（ちゅうじ）なりとてけ

なき小より横須賀（よこすけ）よりとるきの時

ありととるも勢（せい）とひきあて

大権現乃母陣（おほごんねのぼじん）小列（せうれつ）して天皇寺（てんおうじ）にりり

同年十二月

大権現忠次（おほごんねのちゅうじ）して祖父（おじ）大権現忠次（おほごんねのちゅうじ）が家督（けとく）とはげ

べき乃命（のみこと）あり康政（やすまさ）が嫡孫（ちやくそん）なりゆなり

同二年正月朔日（つひらひ）従五位下（じゆゐゐげふた）小叙（せうじゆ）一玄部（げんぶ）

右物（みぎもの）一領（りやう）ととるからり駿府（すまのふ）より江守（えのり）

あり

右徳院殿と稱しよそまりて館林の城小稱こせうは
忠次あつじと稱す大須賀の家と法ぐふふりて
康言やまごりたまたまりりり松平の稱号と用ゆ
それ後康政が家督と法ぐととしし松
とありため楢系と稱すき乃の鈞か令いか
きゆ楢系家元いん松平乃号とたま
りりされども忠次今小松平と稱せうする
事々大須賀の四号よみりりてなり
同九年

將軍家御入海ありきんぐ

右徳院殿より忠次とありて休けりけ
向後むこう

將軍家へ法人を召置しめいび康政が

右例小まこせして忠次の先驅せんくる下したに
將軍宣下御参内しんげの時騎馬きばを扈從こじ
寛永三年八月十九日從四位下よ小叙せう

同二十年七月四日

將軍家乃休小海こ館林たてがやを阿あため奥おく

列白川乃城小^{そら}うり^りに^り可^るの^り御^か
増をたまり^り部^つ合^が十四^{じゅう}可^るを^り領^りも^り白
川^あと^り奥^り列^り乃^り要害^りく^り家^り小^り依^りく^りけ^り今^り
あ^りり^り是^りより^り先^り忠^り次^り館^り林^り小^りく^り新^り地^り可^り
る^りを^りひ^りつ^りく^りふ^りく^りる^りく^りた^り貞^り敷^りの^りの^りど^り

二のしなま
家紋車

● 康高

まもたり

五郎大浦門尉

享祿元年三列洞室小生系

やりのまは

東照大指現小法よりて御譯乃康高

いもか

大須賀

おろすり

松平式部大輔忠次舊號

平氏千景の一族なり

いり

い

とたまより其後松平氏とゆかり

大指現三列遠列のあひまふ小御進教のた

びどもに康言をさるるひまよりてそこそく

の軍切あり

を列久指乃城せめたまふとき康言軍

忠あり

永禄十二年諸将とともふ兵をひま

を列幾川の城とせめおとす

同年

大指現天方此城とせめたまふ時康言先

とて我切あり

元禄元年六月二十八日江列姉川合戦の

時康言先も小すみて小笠原と八郎

等と一番小敵ありありて是とやが

日三年十二月二十二日遠列三方不令戦

のとき一組の頭となり先がりてた

くひとらむら

天正元年八月

大権現三列乃兵とひきかて長篠の城

とせめたまふと云く康言なぐい小村原

康政等乃諸将を列小のうりこまら

不子甲列武田刑部少輔信總道遠南

なぐい小甲列乃詰まらぬ軍兵隊の

きかて八月二十日遠列小教向

森の里より陣を九月十日康言等の

諸將と甲列の兵と城越そあひた

と云く康言先づいりて一番小敵陣

と云くうこまらぬと云く又六町百餘の首
級と得たり其後敵つかふひきまうた
く甲列の兵味方のためりやがらる
事は陣よりいりて

同二年三月

大権現遠列の兵とひきかて遠列の中

大井小出張一たまひ一あ日滞留あつて

かつせたまふと云く山中の切下(敵兵

とひきかて供養人死にまふものお

一康言 治とありてあるは
兵と也敵兵とありてあるは
味方乃諸軍とありてあるは
五月二日比河馬と大井小出されては
對陣の時河馬おのくみかきおなり
一敵兵きうむおるは是とあり
康言もいふはありて兵とあり
ふりてあり

同年六月十七日小笠原左八郎遠列

言天祚乃城と持ながり武田勝頼一語
糸も八月二日

大権現河出陣ありて遠列馬伏塚の四
城とまきづりてありて康言小笠
一め左八郎が前領の比とこもく康言
小たまより言天祚の城とおきいのみ
殺し

曰之年五月二十日三列長篠合戦の時
康言先陣とありてありて武田勝頼

とらやぶ

日年七月二十日 康高

大指現小志こしがひまりて遠列とりの祝訪原しゆほうげん乃

跡とせめ八月二十日はつがつにじゅうにちはかぶ其城とと

野二千八百

大指現沖馬とすめられ小山こやまの城とせめ

たもふ九月五日勝頼兵とひそめ駿河

田たかり中なかつ小こ山やま乃城じやう造ぞうとすめ

耳みみに

大指現兵とまりまりり小山とららりりありて

依よ久く知ち若わ小こ母もししきたたももはは城じやうととう

して人馬おををぶぶももああののすす大だい敵てきききえ

ひ耳みみに

大指現士年と人ひとてかかままたたくくひひひ

ははせんせんたたももああとときき康か高こう康か政せい高こう先せん

ががりりてて諸しよ将しやうととんんみみおおりりととううひひ

敵と大井川と隔て対陣たいじん一いち鉄炮てつぱうととこ

きり矢と花はなと相あととみみ敵てきつつおお小こ川がわ

と越も事ありしはず是よりして

大権現兵と全一して筑波原乃城小入た

まの翌日勝頼小山よりしり

大権現陣と馬伏塚よりしりなまの右勝頼

ひききりしり

大権現も淡松より河内陣あり

同六年五月

大権現駿列田中乃城とせめたまふ少少

諸軍しりし城中小せめ入事ありし

康高が軍兵あり小ありて至氣もと

と色もや城小すしり

同九年九月三日

大権現を列横須賀小新入城とまつ

たまひて康高小是とまゆしり

同七年九月十九日

大権現駿列小河出馬ありて持舟の城と

せめおしり田中赤池小河陣と張る

とき勝頼兵をひきかて駿府より

大指現陣と云り我々たまふ大井河井
ありかぎりおつ康言松平因訪守忠次と
志のこころひして歌をよせむ我のあひで
味方れ人馬おたがひふいさこのごま
えくそそ河とりの歌

曰八年十月二十一日

大指現言天祢の城とりこみなふ河井
とりの屏とつけたきかなる柵をかき入て
こまとせむ法鑑柵乃心小の康言先

もとなりて柵乃外り出城をちくく
ら

曰九年三月二十一日歌興城より出て合戦
を法軍こまとせむ康言が兵いよそ
より柵の外小あつゆいものに先くげとる
ておろくの首と得て陣中ふせめ入城
墨部丹波あげとんとすれとをふんぞ
して討死つわふ城とおとす天正三年
より始て康言馬伏塚よありては討よい

と申すは八年のあひさし天祚の兵とお
戦て軍功あり事あげてついでに

曰十年

大権現言天祚為城の慶義ゆして
横須賀の城と康高小たまりを列
城飼給と修也

曰年六月二十八日康高等

大権現乃先もとなりて甲列ふら入信
將とおありく小糸の兵に列し骨り

たふ大敵すのみ耳かこくし
しら首級と得て軍をまひりてゆ

七月二十七日

大権現甲列小糸御ありて小糸氏直と

甲列新府小対陣一なふ八月二十七日

康高康政等の詔給ひうたに兵士と
はかりて敵の在るやうにかりて康高

が士卒え来りてあひひかまきつるゆに詔給
の兵士ももて案内小糸の兵とてお敵

兵の真目宇田の兵出小わらふゆと見えり
て其よりとほぐこれあり康言康政
なほび小詰物ととふに

大権現乃兵もとかなりて攻兵出をせしむ
時敵これとふせぐ康言が兵士のめも
らうせめつりて首級と得たり康政が
家人も又敵とらう

大権現その戦功と感ぜ

同十二年

大権現豊后秀吉と兵とりまへて尾列

小牧山小大ひやうなまよとき康言志の

びの兵とまへけて敵兵とらう四月九

日長久も合戦の時康言詰物と兵も小

つとなりて三好孫七郎秀次が陣とら

らやぶれ

同年六月十七日康言

大権現よまらうがひまりて瀧川一益がた

てごもれ尾列懸江の城とらうこむ城中

の兵^{へい}よおつてむげ^{むげ}とく^{とく}とよ^{とよ}の^のの^の
康^か言^{ごん}をひら^{ひら}ら^らて^てこ^こも^もと^とら^らも^も一^一益^益ら^ら
つ^つま^まて^て和^わと^とら^らて^てひ^ひけ^けた^たも^も康^か言^{ごん}
と^と人^{にん}ぢ^ぢら^ら小^{せう}た^たま^まり^りの^の城^{じやう}と^と秋^{あき}と^とむ^むげ^げ
と^とん^ん時^{とき}よ

大^{だい}指^し現^{げん}康^か言^{ごん}と^とり^りこ^こふ^ふは^はり^りは^はり^り一^一益^益も
か^から^ら城^{じやう}と^と出^でて^て鐵^{てつ}列^{れつ}よ^よら^らむ^む
同^{どう}十^{じゅう}三^{さん}年^{ねん}法^{ほふ}将^{じやう}信^{しん}列^{れつ}太^{たい}田^{てん}の^の城^{じやう}と^とせ^せし^しる
と^とき^き康^か言^{ごん}な^なむ^むび^びよ^よ井^い伊^い兵^{へい}部^ぶの^の城^{じやう}が^が捕^と

重^{じゆう}改^{かい}松^{しょう}平^{へい}固^こ防^{ぼう}守^{しゆ}康^か重^{じゆう}と^と同^{どう}く^くと^とむ^むて
こ^こも^もと^とら^らむ^む

同^{どう}十^{じゅう}七^{しち}年^{ねん}六^{ろく}月^{げつ}二^に十^{じゅう}日^{にち}卒^{すつ}と^と六^{ろく}十^{じゅう}二^に衆^{しゆう}
法^{ほふ}名^な淨^{じやう}春^{しん}

孝

林^{りん}系^{けい}武^ぶ部^ぶ太^{たい}捕^と康^か改^{かい}が^が妻^{さい}

孝

阿^あ部^ぶ太^{たい}馬^ま色^{しき}忠^{ちゆう}者^{しや}が^が妻^{さい}が^が好^{こう}忠^{ちゆう}秋^{あき}が^が母^ぼ

忠政

五郎左衛門

か那守

實まことはまこと林原武部はやし左衛門康政やすまさり長男ちやうなんなりて

康やすま言ことがことお孫ひまごなり

白しろ徳院とくゐん殿のりより河津かづの忠ただの字なとたまひり

天正十八年てんせいじゅうはちねん小田原陣おだわらじんの時とき忠政ただまさ十歳じゅうさいより

して康政やすまさの属まがの御ごのこよおしむ

四月五日しがつごにち忠政ただまさが家人けにん酒匂さうゐ口くちにおおて

敵兵てきへいとらしてとひりりむ

大権現おほいけんげん因よ東あづま八やち列りやくと領りやうとたまひ時忠政ときただまさ換か

領りやう領りやうとあつたためと總そうの國くに久ひさ多た里り此こゝ

城しろとたまひり

慶長四年けいぢやうしねん四月十七日しがつじゅうしちにち從したが五位ごゐ下した小叙せうじゆ

か那守かのりより何なにも

曰いは五年ごねん因よ原陣はらじんのとき忠政ただまさ

大権現おほいけんげんの命いのちよりりて館林くわんりんの城しろにお守まもす

ときよりときより忠政ただまさをこしけりお孫ひまごが

くゝの家人けにんは館林くわんりんと守まもりぬ

白鷲よあつてひたてまつらん

大権現これとゆふ一たまふゆふもかゝら
後陣よ別も之城敷北して天下統一統

とれよ及々

大権現御家人よ忠賞とおこなひ奉り時
完初よ忠政とめして幸別の本領と

たまひ横須賀の城に居一宗他れ
御加増とくささる

曰八年

大権現將軍宣下の御参内のと忠政
騎馬を扈從と

曰十年

白徳院殿御入海ありて還御の時海次乃

筋よあつてこれをもりごと御駕とまげて

横須賀の城へ渡御あり御馬をひよ
御服銀子等と御領と

曰十二年九月十日卒玄二十七歳

法名叟安

忠次

五郎丸清門

武部左衛門

事はつまびらふとふんえり

家紋七曜

● 清長 きよなが

孫十郎 まごじゅうらう

七郎右衛門尉 しちらうゑもんゑい

林原 はやしはら

家傳いえでんよいくく仁本にほん義長ぎなが末流まがりなり
せいの列りゅうをを志し郡ぐん林原はやしはら乃の里さと一いち領りやう也なり
より林原はやしはらと称号しょうごうともとも後小ごせう三列さんりゅう
に梅領うめりやう也なり

長改 ミゲカウシ

七郎右清門尉

永祿五年ミナト 訖ノチ

清改 シヨウカウシ

孫十郎

七郎右清門尉

三列ミツレツとシ子コ生ナ系ケイ

東照大権現トウショウよヨ法ホウ久ク人ニ多タ其キ後ノチ

始命シヨウメイ小コ

よりて豊崎トヨサキ三郎ミチヲ佐康サノカネ主ヌシ小法コホウ子コ信康シノカネ
逝セ玄ゲンのノ好ヨク二十ニ傳ツ年ネンとト終ハシてテ慶長ケイチャウ十二ニ年ネン
二月

大権現オホイケンのノ命メイとト申マウしシてテ駿列スミレツ久ク能ネ乃ノ疎ソ

居イりリ

同年ドウネン五月ゴトキ二日ニニチ死シすス 六十二ムツハシ歳サイ

法ホウ必ヒツ元ゲン向キョウ

康改 カウカウシ

小平コヘイ右ミダ

武部タケベ右ミダ捕ツ

子孫わり系番別よこまきと出也

女子

仁本半次清門が妻仁本ハ林宗玄部を捕
康政の家伝なり

清定

若狭守 一名政次 生息三列

林宗玄部を捕康政よ伝

重久

侍十郎 生息上列

寛永七年十二月にめく

台徳院殿

將軍家と孫一をてまつる

曰八年七月八日中奥の御番とつて

曰十三年十月御書院番乃組よ入

心記 從二位 兼三列

慶長五年十七歳より城列伏見よりおも

ひき養者となすす也

大指現と稱しきりつひ小 柳花よ

作して存はせ

曰十二年 殉命とあり伏見より後列

よりよりて久能乃城より居り大坂あり

度乃陣より 照久供をすべきのり

再三云ふとまもりしを

大指現の侍より久能乃城を要害の比たり

かざりく是とまもれは我りんよりま

まことまはり 照久久能の城をまもり

元和二年四月

大指現御不例乃内より御遺言小我不慮

乃事ありて廟を久能山よりはくを

林原内記平生を我よりはくおこるるを

我指録の好心記としものありて久能よ

すて新職の本を法とせしむる所存
のわひるは法りしむるごとくなるべし
な多と野分正統松平右衛門正徳林之
但馬守泰朝板倉内膳正重昌是と
たまりて別酒井雅永頭忠世云并大炊頭
利晴安成尉馬守重信と相談して
台徳院殿よ言上し約命としけり
て照久よ法ぐ其と書ふ 作と
たまりて

台徳院殿照久一ツ遺言有べし

曰月十七日

大権現夢所すかりし遺言小浦を
久能の山小おめて所葬送の儀あり

曰月二十五日

台徳院殿久能所社系の内照久り宅
派所ありて 作けりは近信お母
とすも

大権現これとえしむる照久とけり

又た... 規模なり我照久
小おわて... 御前ありて
是より... 御前ありて

照久... 元和三年八月
二十八日... 書寝の

大指現照久よ告... 是より
とわ... 是より

て照久小わ... たい

同四年五月十二日

右徳院殿の命より... 叙

同年六月二十日... 叙

同八年四月

右徳院殿の命より... 叙

同年六月二十日... 叙

同年六月二十日... 叙

く歌よみゆて先侍現の系も後二位
叙せしる是照久が昇進のためなり
日八月十二日糸内昇殿

孝

石野新菟が妻

孝

紀伊大納言頼富の家人山室宗次右清門が妻

孝

一色右馬助範次が妻

照清

越中守 従五位下 生國駿河

母右内宮左清門信盛がむすめ

元和九年

右徳院殿

將軍家御入海乃時照清の系も久能の

おめで 禰 湯 氏

寛永十一年

將軍家沖入海の時六月二十日久野

渡 御 ありて

大指現の沖廟（沖社系の時照清と沖景）

りて御延志のじひありまかりしに

位下小叙一越中守小但ぞうと共と

係よりして今日御社系の係者小列も

庵一とて松内苑助とてりけるに

久重

照清従五位下小叙もとていかに儀の本

より装束の用き有てりしに汝が是なる

所の装束と借与すべし是より照清

内苑助がしやとぞとぞして供を

大馬助 母と小回一 生國回花

寛永十一年

將軍家沖入海の時久能沖社系の時久照久

此むとてして返次（何れや）時久重な

らびよ久改と相具してお湯や〜い何ふ
久重八景

久改

大膳 母回茶 生國回茶

寛永十一年

將軍家沙入法の時久能よ〜ひ〜く〜

洋湯〜何ふ六景

日十九年正月二日

將軍家の命より

竹久代君と様〜ては〜人〜

日年二月九日

竹久代君

大指現の御廟 紅雲山 ありび小山と指現乃

社〜沙〜指の付鳥帽子素袍と恙

諸言よ〜扈從す〜が年の軍三十

二人久改も〜一〜

久改

大京 母回茶 生國回茶

久通 Suetsugu

孫十郎

母同前

生國同前

照直 Teruaki

七郎右衛門

寛永十九年八月十日武列よし家

母名松平右衛門兼正總つとむがしよしめ

家政車 そのしんらま

長忠 おつたぐ

修理亮 ありのまけ

白井 じっわ

仁木之郎義恒あき後胤うしな保国いせのく回丸またま
乃むなむひよひよ居い恒とこもも不ふ成じやう一いつ年ねん
也号やがうもも其そのいいももこの日このひきよきよ居いももら
るるとの眼まなこと号がう也や

四十七歳にて病死

長晴 ながはる

武部左衛門

紀列田色にて討死 廿四歳

長勝 ながかつ

治部少輔

勢列田丸にて圓基乃ありけり歿す

忠總 ちゆうすう

刑部左衛門

甥列をそむびく武勇たかまされありて同公恒柄にて六十六歳よりて

病死

かゝりしより助云一人と基此相
もあ人をこしり 早十三歳小
て切腹す

正重

伊賀守

武田信玄がたけだのぶひで元小勝頼もとしょうりょうより法しほのふ
天正五年駿河真國寺の城しろとわがり
在番ざいばん乃刻小糸流城せうじょうとてりまをまをと
と小糸乃私ひそも根原ねはらといふの駿河
江戸蒲原えごはらまできりて蒲原はらと焼
江戸乃溪くまへ舟ふねと法しほのののきさく

けまば正重まさしげが傍かたわら家小寺せうじ夜花やばな弾たま眼まなこ
源げんた清門せいもんが妻子さいしに江戸えどよりより放火はつかせし
まかりしまかりしときあ人の一人ひとりのひとに江戸
へ入いりししよまのよまの屋やきりししいひけま
どき正重まさしげがいしし妻さい子こををどきどきののむね
は城しろと出いで本ほん糸いとの心こころすままとて
真まこと心こころ寺てらよよここまり居ゐるるとき勝頼しょうりょうと判はん
乃感おんかん状じょうとたまたまふ

同七年九月十九日しちねんきゅうがつじゅうくにち後列持ごれつぢ船ふねの城しろより

政勝 まさかつ

その子息伊兵衛政勝と一重と討
死す時一重六十一歳同心奉成死
源左衛門も討死す其子の
勝頼乃評文に述ゆ

伊兵衛 いへいゑ

生後列 なごり

一重 かずむね 討死す

政盛 まさもり

権十郎 ごんじゅうらう

生後列 なごり

天正十八年 てんしやうじゅうはちねん

名徳院殿 なとくいん へり 法かり

慶長四年 けいぢやうしやうねん 四月廿六歳 しがつにじゅうろくにん 病死 びやうし

政良 まさら

又次清門 またじきせいもん

生後列 なごり

文祿四年ごろうより

白漣院殿（沙奉云）

寛永九年くわんえい五月卒さい七歳ななさいにて病歿びやく

政史せいし

槍十郎やりじゅうらう 長武列ながぶり

元和四年げんわより

白漣院殿

將軍家（流人者）より

正綱しょうこう

兵庫頭ひょうごのう

甲別かべつ没落ぼつらく此後浪人（しゅうじん）となり孫あり乃

とこ海よ天正十一年

東照大権現の御説（ごせつ）より向井兵庫と

いそのきつ子（こ）より久沙（くさ）のりき

庵（いん）きし子（こ）本多作左衛門（もとださくざゑもん）小治（おさむら）計（けい）らき

事（こと）れハ市（いち）相（あい）考（こう）る子（こ）正綱（しょうこう）よわひて

乃じよとてつらつらゆもかりし所を
小海りいづ共何ふ伊豆國乃陣
後河乃船ものれどもや正徳つま
すまよりじよひ伊豆の國西浦田子よ
山本信濃とていよもの尾浦（正徳）
ゆせらちやうたもて飛とてしよ
同年伊豆の必そ令我のとて正徳
本乃わけに敵と相争つて
よつつきらる共首ととりて金

ふかづるよて髪より正徳河を云の
は祭つる首とて事ある處かす
て実換よ持ちて其首と
とてす又敵とをひ引下よ小田原に敵
兵船本弾次郎とおくみて其首
さうとていより年乃色とてけてお

— 155 —

大指現てもあまのりて其刀をゆ
わづまのりな多他た浦門命

へげまばまかりしり河漢よりあま
曰十二年二月織田信雄へ舟の
とけりいさね別伊珠の舟もれあま
戸田らた浦門と曰く伊珠へまうり
こー百鳥とゆりあまて朝合我よ首り
吹小波ふ又小波とゆりあまて歌とふり
わひ強とわり
伊珠陣よりか下てのり後河を
舟領

曰十八年國東河入國のり河加増あ
りて二子石なるを比秀次より

大権現へ船三艘まいつせらるる時三艘の
うらよそよき舟と正總よあづりらま
御家舟となる國
高藤陣のり河治よりみ後屋もあ
まのりべきし

大権現河漢よりなりなご屋へおき河
陣のり河國一河家舟となる

慶長五年國が原河津陣の事以本系川
より合兵して國一系せたまふ
寛永二年三月二十六日六十九歳にて
病死 天漢 云々

忠勝

将監

慶長二年十六歳にて

白徳院殿へり

同五年真田陣の事

白徳院殿乃河保より宇都宮より

白徳院殿忠勝より以らるる九鬼大隅を以

小徳野の新宮等尾列より出張して

近邊と放火をなす

江戸の永也のものを以て

乃忠勝を以て

忠勝を以て

旗本よ志しつひをそまつるこまがの
幸なりかんぞじあく海軍一やと
おげれども志わく台命わつらう
辞もたよあひしずしていりなり
正徳と同ドく舟のりてとごいよ教
向も志れども風雨よこら建て海上
そ日辰とつり国が原所陣の好枝
地り志津して
大指現へ所目えとさしと志けしども

氣色あゆよのぞくそ御目えとさう
可よ正徳がりしとつらとつり孫調とつて
と成地とつり忠務

右徳院殿一志しつひそまつてに
いり家地と百るお領一は心五十人并

國元の御船とあつら

日十九年大坂所陣のいありと意を

倉く五十日のうらよ百丁たりの御船

と播別居り海とそ決つてそ忠勝一

族のこの百八人よこれの百八人
海よりくさきいへしうらうら大坂の
やうきやと九月五日よいしとやうら
大坂傳法十六日本はよ志津と
武蔵守にた浦門将兵と一ふよひい
てまがく歌陣とうらひより其あり
さも成少旗本へ浪進も何よと使
てと村と膳安倍伊部と部事りておせ
のひいといはぐ

日十八日新家よこのく本にれろ火の
もれあがる成んで船もれを申小旗
と八部と志保あ人新家へ船とけり
歌陣とうのひいれい歌池やき一入
もこのくもまはく五十丁まのり陸よ
引つげてありとらのひてふ今日
の本より九鬼長門守松平武蔵守より
炭若狭に槍と助とふよ志勝新家へ
うはり下福嶋にわく志保と槍と

うけりて在者

廿日小野田下福崎より歌の物より二

人へ与られりたりと一銀の半月乃

が鉄炮三百挺ぐり引ぐ忠勝

番所へきびくうらむふゆこあひり

きて何れもあてうらあひ武蔵守の

二三人へされて飛せりあふまびく

ありて歌引きりぞく

廿二日河内よりとらう新家の御中

と後若狭指し助ふりて忠勝を新家と
又分一のあひふりて海の家あり
流るるやとおほせきり

廿八日安海帯刀忠勝永井右近

忠勝云井大炊頭利緒水野監物重忠

井上重計以正統諸陣と見えし海と記

新家より忠勝よりびきき

廿九日子賀と忠勝才た門と二人番

小五分へりてむらむら石川重成

尾川とこーして回日乃くまがいに五ふ一
その七のまゝくが
その百殿頭久保指右衛門本濃集巻

小糸舎也

回日乃本五ふ一のてきれなぐれ道近

くお祭と志勝とこころしくと歌歌夫が

とわけて引きりぞくと夫が乃のある心

まぞ通るけしよ三首より鉄炮とまきび

しくうらわけり夫とまらつゆの忠勝に

鉄炮と乃の夫とまらわくりまれまき是

まうけとめくうとだかまが才次門を

夫とまらもよわたりて飛ぶとま場小

ありあふくの忠勝り士年二十人むり

お祭が士年十人むりなり本の時家と

まらて下福清へまらりて見れな壱と

ひらさ二間がどにかりういだそをわく

ゆいあ鉄よそいゆふるくもそをまれと

かそ道の一まらりまらるん流りて忠勝

才文字れ終よそいそそ乃板とひ美

ふあーいながきとこえてうらし
あふんく歌歌軍一うをいけ
けきども歌とやうよ引きうけく
とらうともあつて川れん
やうきれい馬まもくよ巴の紋と
船さるよい鳥色乃棒よ張のこの
とまらぬ船とえけ忠務は船おん
とすみよりうとえて歌船のうら
るはかとらうをせけうふんそ

と忠務をも總とひきとめ引とせん
り有歌舟うらとびおりてまふと
へふげんとも船とひまけり
うはうえけきを具足とめ
船のうらふわらと忠務つきた
て士率よとびとせ一前千賀
り合忠務が船れうらと
感も其は白きもくふ相乃踏と
とんよ一と船の中よあつと忠務

これのよ下知してあの船はうとれと
いひも道もあよせうもしてあえん
けもぐ忠務えんひてえうう花い
具足の上帯とさくさえて南海長濱
さよものも是れと帯と引さう番
よ花入とえて十四五人つづいてあみ
これぞ敵いへて船とけりす
陸海とさうて引退くを忠務もれ
その船と家よりて下福海へ引はか
る

元和元年大坂再乱のとき四月廿七日
大坂より和泉の場をやきさらし
きあし道が船を場へ入るなりか
—このやとえさげ御旗本へ進
もべあさるまうりむいよあよ大坂は
乃堤よ敵あまひい入て鉄炮のもの
千人むかり海上へ入てこれ忠務な
てハ大敵よむいひを利と均がしと
あひの誅よりはぐ鉄とねりあよ

此よりききし船は舟ともいふ沖の方と通
りて岩乃和留のうらみあげし一船
とあつし一船所とあつしれは忠務力
およびす一人船をも陸へあがんと船と
とらうまう前よ場うらみの例二の例
ゆてありし船とあつしとてあがり
し忠務内よ長谷川に度眼久兵衛
とあつしものと陸へあがて舟と又艘も十
艘もあつしと下知し船はあ人

の者小船よあり陸へ舟とせ船とあ人
とあつしとあつし敵鉄炮とあつしと
ひもつしとあつしと忠務舟とあつし
人船とあつしと鉄炮とあつしと敵
とあつしとあつしとあつしとあつしと
おつしとあつしと何忠務舟とあつしと
とあつしと下知し船とあつしと鉄炮と
敵舟とあつしと小船のあつしとあつし
らも忠務舟とあつしとあつしとあつしと

給^{あそ}ま^いう^いけ^いご^いあ^いる^いよ^いき^いご^いつ^いず^いあ^いれ^い
も^い痛^いこ^いあ^いや^いじ^いり^いあ^いか^いら^いご^いー^い五月七日
大坂落城の別忠務^{あそ}に^い居^い崎^いを^い出^いせ^い
して^いこ^いま^いあ^いり^いさ^いい^いご^いも^い也^いせ^いあ^いれ^い
こ^いつ^いけ^い居^い崎^いが^いう^いか^いけ^いつ^いけ^いれ^いば^いあ^い
大坂よ^い火^いれ^いも^いあ^いが^いり^いて^い軍^いえ^いん^いを^い取^いら^い
も^いよ^いあ^いり^いと^いこ^いら^いり^い極^い系^い橋^い大^い野^い能^い理^い
屋^い敷^いの^い下^いも^いぞ^いじ^いよ^い不^いよ^い色^い利^い甲^い斐^い守^い
中^いと^いさ^いら^いき^いり^いて^い極^い系^い橋^いれ^いる^い人^いと^い

と^いま^いず^い甲^い斐^い守^い小^いと^いり^いて^い極^い系^い橋^いも^い
し^いけ^いつ^いけ^い合^い戦^い場^いれ^いや^いも^いと^いえ^いら^いけ^いて^い
か^いん^いた^い
日^い八^い日^いの^い本^い大^い雨^いが^いし^いけ^いも^いも^い夜^いの^い
ら^い小^い女^いん^いを^いと^い出^いて^い所^い旗^い本^いよ^いら^いふ^い
大^い指^い現^いを^い茶^い磨^い山^いよ^い所^い陣^いと^いめ^いら^いり^い
し^いけ^いの^い海^いり^いら^いや^いも^いら^いし^いら^いら^いら^いら^い
所^い目^い入^いる^いも^いの^いし^いけ^いも^いと^い意^いも^い
あ^いく^い陣^い屋^いへ^いか^いら^いふ^い

其心好

將軍家（御在云）

寛永十八年十月十日
病歿六十歳
法名陽岳玄祐

忠宗

古清門

慶長十九年八月

台徳院殿（御目及く）

將軍家（法明）

忠繼

兵部

寛永四年八月

台徳院殿（御目及く）

將軍家（御在云）

正真

八郎

寛永十六年十二月廿二日

將軍家へ御目及

正次

舟之助

寛永十六年十二月廿二日

將軍家へ御目及

家紋とりぬの丸

